

〔優秀賞〕

◇ 自分らしさを生かせる社会を目指して ◇

出流原小学校 5年 小倉 秀斗

「男女がたがいに人権をそんな重ししながら、共に支え、責任を分かち合い、性別にかかわりなく、自立した個人として個性と能力を発きすることができる社会」「全ての人が自分らしい生き方を選たくし、心豊かにくらすことのできる社会」

「男女共同参画社会」とは何かを調べる中で、この言葉が心に残った。

お母さんにこの話をすると、「女は家事・育児」「男は外で仕事」と、性別で役割を自然に決めている意識が昔からあるのだと話してくれた。なるほどと思ったけれど、よく分からない意識だと思った。それはぼくが、男だから、女だからと言われたことがないからだ。本当にそんな意識があるのか、ぼくは、周りの大人を少し観察してみることにした。

お父さんは毎日仕事に行く。お母さんは、外では仕事をせずに、家の中の家事やぼくと弟の世話をしている。

「お母さんは、なぜ外で働かないの。」

ぼくが質問すると、

「お母さんも外で働きたいと思っているけれど、今は二人のそばで世話をすることが一番大切なの。」

と教えてくれた。お母さんと一緒にいられることは、ぼくにとってもうれしいことだと思った。

次は、おじいちゃんとおばあちゃんのふだんの様子を思いうかべてみた。おじいちゃんは、ご飯の後片付けをしない。おばあちゃんがいつも食器などの片付けをして、ずっと動

いている。男女共同参画について知るまではそのことが当たり前だと思っていた。でも、ぼくの中にも、知らないうちに性別にとらわれた思いこみがあることに気が付いた。これが、性別で役割を自然に決めている意識なのだと感じた。

学校ではみんなと一緒にそうじをする。仕事によって男女を分けることはない。ぼくは黒板そうじを担当しているけれど、友達の方がきれいにそうじできることがあり、練習している。でも細かい作業は得意だ。きれいに文字を書くことができる。図工の時間も大好きだ。どんなに細かい絵でも集中して、最後まで完成させることができる。でも、給食をみんなに同じように配ることはむずかしいと感じる。ぼくのお母さんは、そうじが大の苦手だ。反対にお父さんは、そうじが大好きだ。人には得意なものと、苦手なことがある。それは性別がちがうからではない。

自分ができることを進んでみんなのために行動することで、だれもが共にかがやく社会が実現できるのではないだろうか。性別にかかわりなく、みんなが自分らしさを出して、助け合い支え合えたらいいと思う。そして、得意なことも苦手なこともおたがいにみとめ合い、共に責任をもちつくりあげる社会こそぼくが生きたい未来だ。